

1 岩手県内の保育所で働く保育所看護職を対象とした専門性を高める取組み

岩手県立大学看護学部 准教授 相墨生恵、岩手医科大学看護学部 教授 岩瀬光子、菊池陽子（白岩保育園：遠野市）、澤口宏美（本宮保育園：盛岡市）、袖林典子（雫石保育園：雫石町）、石田真紀子（病児等保育施設：遠野市）、高橋貴子（つばめ幼稚園：滝沢市）、小泉湧（立根こども園：大船渡市）

該当する
原則

原則 9：持続可能性を推進する

1. 活動の背景

保育所において看護職の配置は推奨されているが義務化はされていない。保育所保育指針においても「子どもの健康状態並びに発育及び発達状態の把握」「疾病等への対応」において「看護師等が配置されている場合には、その専門性を生かした対応を図ること」と記載されているのみで、保育所における看護職の役割を明確に謳ったものはない。

保育所で働く看護職は医療機関と異なる知識や技術が必要とされる、しかし、看護基礎教育において保育所等の看護職の役割を学ぶ機会はほとんどないうえ、各保育所に一人配置の場合がほとんどで、体系的な学びにつながりにくい現状がある。また小児看護の経験がない看護職も多く、保育所での子どもの健康管理に困難感を抱いている看護職も多いが一人配置のため相談相手がいない、業務が多岐にわたり、子どもの健康支援など看護職としての専門的な役割を十分果たせていると感じられない保育所看護職も多く、短期での離職者も多い、など多くの課題がある。

2. 活動の経過

以上の背景を踏まえて、2013年に、筆者、県立大学卒業生（3回生）、現職の保育所看護職者の3名で研修会開催のための会を立ち上げた。研修会の目的は「子供にかかわる専門職者としての知識と技術のスキルアップ」と「岩手県内の保育所看護職のネットワークの構築」とし、受講者が受け身の研修会ではなく、能動的に参加する研修会を目指している。また、保育所で働く看護職たちが主体となり、研修会を企画・運営できることを将来的な目標としている。



(1) 2013年～2014年

開始2013年～2014年				
研修会の目的 小児にかかわる専門職としての知識と技術の向上 ⇒小児を専門とする医師または看護師に講義や演習を依頼				
発達障がいについて	看護師	塩飽仁氏	東北大学小児看護学 教授	●
食物アレルギーについて	看護師	鈴木千鶴氏	宮城県立こども病院（小児アレルギーエディケーター）	●
子どもの成長発達と子育て支援における育児相談のポイント	看護師	相墨生恵	岩手県立大学（小児看護専門看護師）	●
事故やけがの理解と応急処置・小児の救急搬送法	看護師	佐山典子氏	東北大学病院（日本ACLS協会PALSプロバイダー）	●●
小児の感染症と予防接種	小児科医	堺武大氏	さかいたけお赤ちゃんこどもクリニック院長	●
子どもの生活リズムの大切さ	保健師	岩瀬光子	岩手県立大学	●

「子供にかかわる専門職者としての知識と技術のスキルアップ」を主たる目的として研修会を構成し、講師は小児を専門とする医師または看護職者に依頼した。「食物アレルギー」「感染症と予防接種」など保育所でかわることの多い疾患の知識や対応を学び、「子供の成長発達と子育て支援」「子供の生活リズムの大切さ」など専門職として子供の健やかな成長と発達を促すための知識や技術を学んだ。参加者からは『関わりが難しいと尻込みするだけでなく、子供達と関わっていけるようさらに知識を身につける必要があると痛感した』『保育に関わる人はみんな勉強した方が良くと思った』など学ぶことの大切さへの気づきの声があった。また『保育現場では看護職は口を出しにくい風潮がある』などの一人職であることでの悩みの声があった。受講者のうち現職の保育所看護職 1 名が事務局に加わった。

(2) 2015年～2016年

2015年～2016年				
研修会の目的 ネットワークの構築 ⇒交流会				
実践につながる研修会 ⇒実践報告（メインテーマに沿ったそれぞれの活動報告）				
障がいのある子どもと家族の看護	看護師	荒木曉子氏	千葉リハビリテーションセンター（看護局長）	●
障がいのある子どもの受け入れ・支援の実践	看護師	相墨生恵	（小児看護専門看護師）	●
保育園における保健指導・感染症対策	看護師	藤井祐子氏	全国保育園保健師看護師連絡会 副会長	●●
保育園における保健指導・感染症対策を実践するにあたって	看護師	藤井祐子氏	全国保育園保健師看護師連絡会 副会長	●●
歯の大切さと子どもおよび保護者への保健指導の実践	歯科衛生士	谷地美貴氏	宮城県立こども病院	●●

研修会が軌道に乗り始めたところで「岩手県内の保育所看護職のネットワークの構築」のため「交流会」を加えた。2回目からは、専門職としての交流会であるため事例検討会の形式とした。また、実践家のための研修会であることから、「実践報告」として、メインテーマに沿ったそれぞれの活動を具体的に話してもらい、受講者が研修内容を実践につなげやすいような構成とした。参加者主体の研修会となるよう「伝達講習」などの時間も設け、他の研修等での学びを共有できる場ともした。参加者からは『他の園の状況を知れて良かった』『実際に園に戻って何をやればよいのかが分かった』などの声があった。受講者のうち現職の保育所看護職 1 名がさらに事務局に加わった。



(2) 2016年～2019年

2016年～2018年				
能動的な研修会 ⇒事例検討や演習（メインテーマに沿った今後の活動）				
各地域における活動				
乳幼児期の映像メディアと向き合い方	小児科医	田澤雄作氏	仙台医療センター	●●
こどもの便秘と肥満	小児科医	鮎川大樹氏	宮城県立こども病院（副院長）	●●●
お口と身体とこよばの発達・生活の中で大切な事	言語聴覚士	松田輝美氏	イーハート・フミくんぐ	●●●
乳幼児期に多いアレルギー性疾患・疾患の機序と緊急時の対応を学ぶ	小児科医	北沢博氏	東北医科薬科大学	●●
緊急時対応における看護師の役割と職員間の連携	看護師	並木由美江氏	前全国保育園保健師看護師連絡会会長	●●

2019年				
能動的な研修会 ⇒事例検討や演習（メインテーマに沿った今後の活動）				
小児期に多い疾患・こんな症状が見られたら！？	小児科医	鈴木力生氏	りきおこどもクリニック院長	●●
子どもの虐待について～保育園看護職として～	児童福祉士	米澤克徳氏	岩手県福祉総合センター児童女性部相談課上席児童福祉士	●●●
コロナ禍により中断				

出席者がより能動的に参加できるよう「交流会・事例検討会」を「グループワーク（GW）」へ変更した。その回のメインテーマに沿って、保育所で使えるマニュアル作りなどを行うことで、交流を図りながら、研修会の講義で得た知識を実践の場につなぐ時間としている。GWは経験年数を加味して調整し、単に交流を図るだけではなく、経験の浅い保育所看護職者が知識とスキルを吸収できやすいよう環境を整えている。参加者からは『実際にマニュアルを作ってみて、これならやれそうだった』『悩んでいたことや対応についてたくさん方法を聞くことができた』などの声があった。受講者のうち現職の保育所看護職 2 名がさらに事務局に加わった。



(2) 2022年～現在

2022年～2023年				
能動的な研修会 ⇒事例検討や演習（メインテーマに沿った今後の活動）				
各地域における活動				
新型コロナウイルス感染症～保育園での対応について語る～	小児科医	木元康生氏	前全国保育園保健師看護師連絡会会長	●
保育園の看護師が虐待を見抜くには、子どもの虐待	保健師	菊池美恵子氏	元千葉市花見川区保健福祉センター健康課長	●●
保育園の看護師が虐待を見抜くには、保健師の視点から	言語療法士	松田輝美氏	一般社団法人アクティビティわてアクティブキッズ	●●●

コロナ禍により中断していたが、現職の保育所看護職者らからの要望により再開した。再開初回は感染予防に十分留意しながら、「感染対策」をテーマとしたGWだけの構成とした。『もっと早く集まって情報交換したかった』『それぞれの施設の話の話を聞くことは、とても参考になる』や『集まることができただけでよかった』などの声があった。

2023年からは通常開催に戻し、1年に2回、継続して開催している。退職に伴う事務局の退会や新たな事務局員の入会もあり、現在は、現職の保育所看護職 6 名、大学教員 2 名の 8 名で事務局を運営している。

3. 今後の活動

本研修会開催の目的である「子供にかかわる専門職者としての知識と技術のスキルアップ」と「岩手県内の保育所看護職のネットワークの構築」は一定の成果を感じつつも、離職による研修受講者の入れ替わりが多く、岩手県における保育所看護職の専門性の向上に寄与できているとはいいがたい。しかし受講者らが能動的に研修会に参加していることや保育所で働く看護職者らが主体となり、研修会を企画・運営しつつあることなど、この取組みが、本人たちの手によって今後も継続されていくことが期待できる。

コロナ禍による中断後、再開した初回の『集まることができただけでよかった』の声からも、不安を抱えながら専門職同士の情報交換の機会を心待ちにし、互いに顔を合わせただけで安堵感を感じることができていたことがわかる。一人職種でありながらcovid-19感染拡大のような、エビデンスのないことに対し専門職としての判断が求められる過酷な状況を体験した保育所看護職にとっては、同職種同士で情報共有することが、知識や情報を得るだけでなく自分の実践を確認でき安心や自信につながる重要な場となっていた。一人職が多いという特殊性も踏まえつつ、研修会が新しい知識を学ぶ場だけではなく、日々の自身の実践を互いに確認しあえる場としての役割もあることを踏まえ、今後もより受講者の益となる研修会を企画運営していきたい。

